会報「センダードつうしん」第7号をお届けします。

あの「3.11」から、干支で一回りしました。世間では「3.11」の風化が懸念されたりしてますが、わたしたちにとっては、風化どころか、忘れたくても忘れられないというのが正直な気持ちではないでしょうか。また、ウクライナ戦争（ロシアによるウクライナ侵攻）は解決の方向さえ見えず、この間にも人命が失われていることを考えるとただ無力さを感じざるを得ません。そして、コロナ感染症は収束の兆しがあるとはいえ、ポスト・コロナの課題は山積です。そうしたなかで、日本では、ショック・ドクトリン的な政策が進められようとしています。これらを凝視することが不可欠です。

さて、今号においては、特段のテーマを設定せずに投稿を頂きました。日頃から、気になっていることや考えている問題が、多方面から論じられています。ご一読あれ。

「白い紙運動」と ラフマニノフの「ブォカリーズ」

岩谷　芳江

1915年に作曲、出版されたピアノ伴奏付きの歌曲「ブォカリーズ」をご存じの方も多いかと思います。ラフマニノフは「ブォカリーズ」の作曲に先立ち、「13の歌曲集」を出版しており、これら13の歌曲には全て歌詞があります。しかし、「14の歌曲集」の最終曲として追加された「ブォカリーズ」には歌詞がなく、それゆえに近年、様々な楽器で自由に演奏されてきました。ロシア革命の2年前の作品です。

ラフマニノフは当初、ソプラノまたはテノールの高音でアァーアァーと歌う方法を想定していたとも言われております。ロシア語の歌詞から解放されたこともあり、西欧的な中に民族的な哀愁を深く感じさせる美しさもあって、世界中の多くの演奏家による、その楽器にあった編曲での自由な演奏を可能にしてきました。

私はマイスキーのチェロが大好きなので、ミッシャ・マイスキー（娘リリーのピアノ伴奏）のため息が出る程の美しい「ブォカリーズ」、そして白血病により38歳の若さで天国に召された歌手の本田美奈子が澄んだソプラノで高らかに

歌い挙げる「ブォカリーズ」が夫々お勧めです。（YouTubeで聴くことができます。）

他に、お気に入りの演奏に出会った方はご感想などお寄せ頂ければ嬉しいです。

さて、中国の過酷なゼロコロナ対策、新疆ウイグル自治区の火災での消火の遅れで10名が死亡した事故や諸々の言論統制に対する抗議として、2022年の年末、中国全土だけでなく、日本国内でも留学生中心に「白い紙運動」が広まりました。

習近平指導部への抗議として、多くのデモ隊が一斉に掲げたA4の白い紙。 白い紙は、何も書けない程の弾圧の厳しさ、書ききれない程の多くの課題の存在についてなどが想像され、殊の外、雄弁に語る表現手段であったことに驚くばかりでした。その証拠に、公安当局はその場で取り押さえることはなかったものの、その後、参加者を調べ上げ相次いで拘束している模様です。残念でなりません。

白い紙を掲げるデモをTVニュースで観たときに、なぜか歌詞のない「ブォカリーズ」を想い浮かべ、中国の多くの若者たちが白い紙に託す願いが叶い、自由に羽ばたく力となることを祈ったことです。

宮沢賢治が聞いたジャズ

今野　禎市郎

「宮沢賢治と音楽」の出前講座を始めます、と一筆添えてあった。この正月に旧知の佐々木孝夫さんから届いた年賀状である。

彼は昔の仕事仲間で、「洋楽」に詳しく、いろいろ教えてもらった。音楽、放送の世界で「洋楽」というとアメリカンポップスやジャズといった海外の流行音楽のことで、クラシック音楽は別の区分になっている。

クラシック音楽を好んだ宮沢賢治はチェロの勉強に東京に出たり、コンサートを開くなどしていたが、佐々木さんは、宮沢賢治がクラシックや教会音楽のほかにジャズやタンゴも聴いていた。よく知られている彼の童話『セロ弾きのゴーシュ』のテーマ音楽（と言っていい）『印度の虎狩り』は実は架空の楽曲名である。ニューメイフェアダンスオーケストラのレコード『印度へ虎狩りにですって』から、タイトルだけ借りてきたようだ。蛇足だが、戦後この童話がオペラや人形劇、アニメ映画になったので、そこで使われている「インドの虎狩り」という楽譜が今にある。

「ポランの広場」や「春と修羅」「火薬と紙幣」「風景とオルゴール」など多くの賢治作品に「洋楽」を聴いてたなと思われる箇所がある、という。

佐々木さんは、賢治が聴いたであろうSPレコードを、クラシック、ジャズを問わず収集して作品との関連を丹念に調べた。さらに楽曲をセレクトし、復刻盤として5枚組のCDアルバムをリリース（発売）した。

これが高く評価され、一昨年宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞を受賞した。

ＳＰレコードというのは、毎分７８回転（回転数は多少幅がある）のレコード盤でのことで、蓄音機で聴く。今のＣＤの前がＬＰだから、さらにその前の音楽メディアである。骨とう品。鋼製の針でレコードの溝がすり減って、ノイズや音飛び＝針飛びが時折ある。

ニューメイフェアダンスオーケストをはじめフェリックス・アルント、シカゴベンソンオーケスト

ラ、オリジナルデキシーランドジャズバンドなどの伝説のバンド演奏が、彼の感性にどんなインパクトを与え、思想に影響したのか知りたいが、残念ながら書き残したものはない。しかし作品の随所に埋もれ火のように存在する。作品を読んで見つけるか、あるいは佐々木さんの講演を聴いて知るか。いずれかしかない。

佐々木さんは、古い蓄音機を携えて各地で講演する。出前講座のタイトルが「蓄音機で聴く、宮沢賢治とジャズ（または音楽）」第1弾して盛岡のJazzCafeWest38と紫波町の民泊「宿・はこや」で3月に開催した。今後各地を回る。連絡先は仙台市青葉区小松島4-20-12宮沢賢治音楽ギャラリーDestupargo佐々木孝夫、jmb@kih.biglobe.ne.jp　Tel.022-398-6088である。

雪の運命-科学的には 春になれば水となり流れてしまう-

末　永　　茂

今年は積雪が少なく今のところ大分楽ちんです。しかし、降雪の形態は一定しておらず、中々手強いものである。昨日、「雪の結晶がきれいだな！」。中谷宇吉郎の本でも読み返してみようか、などと思って歩いていたとたんに足を捕られ、思いっ切り転んでしまい足首を捻挫してしまった。朝の低温で凍結していたのが分からなかった。こんなことはガキの頃以来だが、素人判断ながら幸い骨折には至らない様なので勝手に安堵している。ただ数日は外出不能なので、この原稿書きには打って付けの時間になってしまった。

大雪になっても春になれば確実に融けて無くなる。冬場は障害になるが廃棄物の堆積と違って、決して邪魔なものではない。厄介だと感じても付き合っていくしかない。天気予報はかつてのレベルとは異なり、観測データの大量集積と処理能力の飛躍的発達のため、長期予報もかなりの精度になってきた。また当日と翌日の予報は80％以上の正確さまで来ており、日常的に大変役立つ科学データになっている。科学的研究とその成果の見本のようにさえ思われるものだが、そんな時代にあっても予測困難なものが、冒頭の些細な出来事であり、これが車の往来などが重なると、命を落としかねないので油断はできない。

科学が織りなす人知がどれだけ集積されても、社会の在り方までは見通せない。あるいは社会像を確定できないのも真理ではないか。ある特定の人々が提起した科学的な社会があるとしても、そこに到達するためには一筋縄にはいかない。現存する社会には非科学的な社会的イデオロギーや伝統的な制度・慣習が残存しており、強権をもってしても矯正することなど出来ない。

おそらく、ウクライナ戦争もそうしたものなのだろう。ウクライナとキエフがロシア発祥の地であるとする歴史観もあるが、それをもって「クレムリンの属国にしてもかまわない」「従わない方がどうかしている」「少しはプーチンの言い分も聞いてやれば良いではないか！」といった言論も時々聞くが、そうしたものなのだろうか？

このまま事態が膠着すれば、おそらくウクライナの国土と市街は廃墟の山になるだろう。ヨーロッパの歴史はこの繰り返しで推移してきたから、特段に驚く程のものでもない、というのが歴史家の大方の見方であろう。

こうすれば「社会の矛盾は消滅する。より良い社会に発展的に止揚できる」等々の理想郷

論議もあるが、実現したためしはない。精々そうしたことを志向し、部分的にある観念を受け入れ、修正されるのが関の山である。しかし、それで充分だと思う。科学的に正しいとされるある特定の観念の全体社会など、生き辛くてしょうがない。極少数の特権階級を生み出すだけである。そんな社会はまっぴら御免だと、ウクライナ国民は我が身をもって世界に訴えているのではないだろうか。清貧と権力欲なき指導者が理想ではあるが、ガンジーの国家インドですら人口爆発の事態をコントロールできなかった。やはり最高指導者は10年を超えることなく、交代するしかないのではないか。(2023/01/24)

「団塊世代」と「絵本」

半田　正樹

昨年12月の「羅須ゼミ」の主題は「絵本」だった。話し手の工夫が行き届き密度の濃い時間を愉しんだが、その談論のなかで強く印象に残ったことがある。いわゆる団塊世代(学生時代は一部全共闘世代)は幼児期に「絵本」[注1]と出会っていなかったらしいということが判明したのである。少なくとも当日の団塊世代の参加者はわたしも含めて全員がそうだったし、その後何人かの同世代の知人などに訊ねても一様に同じ反応が返ってくる。

戦後2年(1947年)ないし4年(1949年)に生まれた、平均年間出生数が260万人強の団塊世代の多くが「絵本」と親しむことなく育ったというのが、もし「本当」だとすれば、「世代論」の対象としてすこぶる面白いに違いない。こころを育てたり、和ませたり、時に揺さぶったり、あるいは輪廻応報や福徳円満をそれとなく示してくれたり、まことに変幻自在な「絵本」。そうした尤(ゆう)なるものと交わることなく思春期・青年期に至ったのであれば、団塊世代が何がしかの欠焉をかかえていても不思議ではないからである。

1925年生まれの丸谷才一の文芸評論の一つに独自の視点に立つ『忠臣蔵とは何か』がある。1985年に発表されたが、従来の「忠臣蔵」論を大きく塗り替えたことで知られる。その丸谷才一が、生まれて初めて出会った本としてあげたのが岡本帰一の絵本『四十七士』である。先日書棚を整理していた時に偶々再会した『季刊:本とコンピュータ』(終刊号「特集・はじまりの本、おわりの本」2005年)で知った。人生の始まりで邂逅した「絵本」の何かがいわばこころの一朶(いちだ)に止まり、沈潜し半世紀以上の時を経て創作の形で表出された一例と考えられる。ひるがえって、絵本との遭遇が後年の創見につながる丸谷才一的体験が欠けている可能性があるのが団塊世代ということになる。

では、なぜ「団塊の世代」だけが、絵本体験をもたなかったのだろうか？容易に想像がつくのは大戦後に固有の事情だ。例えば、国立国会図書館サイト内の「国際子ども図書館」の「絵本の歴史」[注2]には、戦後の著しい物資不足の下での紙欠乏や印刷所の払底にくわえて、GHQの検閲・統制が「絵本」出版にも影を落としていたことが記されている。戦後すぐに子どもの本、絵本の刊行に意欲的な動きはあったものの、本格的な「絵本出版」は1950年代に入ってからだったということである。1953年の岩波書店〈岩波子どもの本〉やとりわけ1956年の福音館(書店)の月刊物語絵本『こどものとも』の出現まで待たなければならなかったとある。いうま

でもなく1956年は、『経済白書』序文に「もはや戦後ではない」と謳われた年だ。「団塊世代」は、すでに絵本・児童書になじむ時期を過ぎていた、いいかえれば「絵本」にたしなむことなく思春期を迎えた時期といっていいだろう。

「絵本」知らずであるがゆえの「団塊世代に潜む欠焉」論は、「欠けていたからこそ」の議論とともにきわめて興味深い論点ではある。

しかるに、絵本・おもちゃの販売も手掛ける作家落合恵子によれば「絵本は生まれて初めて本というものに出合う最も小さな人から年齢制限なし、深くて豊かなメディア」であるとのこと(注3)。また「絵本」関連の本を数多く上梓しているノンフィクション作家の柳田邦男の一冊には『大人が絵本に涙する時』(平凡社)がある。

古来稀なりの「古稀」どころか間もなく「喜寿」を迎える「団塊世代」も遅くはない。子育て時の「絵本」経験は思い消し、人生を振り返りながら自分の美学・哲学そのものずばりの「絵本」とめぐりあう勿怪の幸いを味わうということもちょっとした洒落と言えるだろう。

(注1) ここで絵本というのは、絵雑誌や童話や児童文芸誌とは区別される「文字と絵を組み合わせて身近なものやことばなどを子ども向けに示した単行本」を指す。

(注2) https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/tenji2017-03_leaflet.pdf

(注3) "落合恵子の絵本の時間"(NHKラジオR1:毎日曜、朝6時15分)のオープニングの決め台詞。ただ、わたしには「・・深くて豊かなメディア」の「メディア」という言い方がしっくりこないし、落ち着かない。いいかえるべき言葉を模索し続けている。

茨城県水戸市／観梅レポート

河合 秀次

先日(3/14・火)、久々に僕自身が中高校時代を過ごした茨城県水戸市にある偕楽園で梅を見てきました。ご存知の方も多いかと拝察しますが日本三名園の一つです。(あと2つは岡山県岡山市／後楽園、石川県金沢市／兼六園)尚、偕楽園以外の2公園は入場料を徴収しますが「偕楽園だけは無料」が長年相場でしたが、4年前から300円(70才以上150円)です。以下、ざっとご紹介まで。

(1)歴史:今から遡ること190年(1833年＝天保4年)、徳川斉昭(1800～1860)が藩内随一の景勝地(遊園)として造園し、1842年(天保13年)開園に至りました。園内には約100種類の梅3,000本が全国の皆さんをお迎え致します。

(2)アクセスとロケーション:JR(常磐線)水戸駅前からバスで15分程、偕楽園入り口で降りるのが便利でお奨め。

(3)観梅時期:年によって差異はありますが、通常は白梅が2月中旬から3月上(～中)旬頃まで、3月中旬には紅白の梅が短期間重複し後半には紅梅だけ、と言ったところでしょうか。

(4)園内には有名な「好文亭」:一度は是非お奨めです。斉昭はここに文人墨客や領内の人々を集めて詩歌や慰安会等を催しました。

(5)清冽な「吐玉泉」:上記好文亭の茶会で使う為の水を運ばせる為に作られた泉で、風情を醸し出しています。「吐玉泉」の名は、とある故事に因んだものだそうで、ただ水を吐く泉としてだけでなく、儒学の理想と教えの湧き出

る泉となれ、という思いを込めて斉昭はこの泉を『吐玉泉』と名付けたのだそうです。但し直接の飲用には不適と(事務所談)。

(6)ローカル食:JR水戸駅に通じる大通り沿い含めアンコウ料理の店が20軒程ありますが、どこもそれなりに良いお値段です。ちょっと飲んだりすれば(飲み方にもよりますが)1人1万円は覚悟した方が良さそう。

(7)水戸の梅大使:何よりも嬉しいのはウフーッ!園内には例年多くの若い女性から選出された梅娘嬢達(今年は6名)が笑顔で来園者を出迎えてくれます。(聞けば地元の大学生とか)。気になる!写真撮影ですがこれも自由。皆さん行列して撮影してますヨ。

(8)蛇足(梅まつり以外):桜/かたくり/紫陽花(あじさい)/萩等の各お祭、更には弘道館、東照宮、芸術館、歴史館、大洗海岸等見所の多い県庁所在地です。是非一度お時間を作ってご来水あれ!　　(以　上)

租税負担率、国民負担率、および潜在的国民負担率

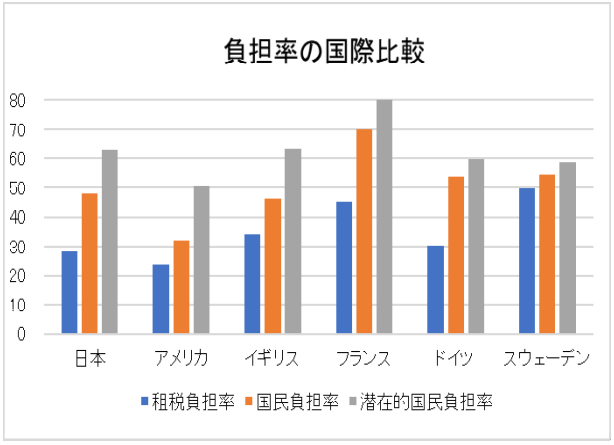
－日本は高負担国である－

田中　史郎

コロナ感染症、ロシアによるウクライナ侵攻、いわゆる少子高齢化などの状況は、生活レベルにも影を落としている。物価高など日々の生活不安が増すなかで、福祉や社会保障に関心も高まっている。社会保障を論ずるさいに、高福祉・高負担か低福祉・低負担かという議論がある。むろん福祉が充実することに反対する人は少なかろうが、それには相応の負担がつきまとうという議論である。そうした中で、北欧などが高福祉・高負担国の、アメリカなどが低福祉・低負担国の典型とされ、日本は中福祉・中負担の国と言われてきた。

しかし必ずしもそうではなさそうだ。ここでは公的な負担の問題に限定してみよう。こうした負担を計る統計指標に「租税負担率」、「国民負担率」、および「潜在的国民負担率」がある。それぞれは以下のように定義される。「租税負担率(%)＝租税／国民所得×100」、「国民負担率(%)＝(租税+社会保険料)／国民所得×100」、「潜在的国民負担率(%)＝(租税+社会保険料+財政赤字分)／国民所得×100」。みられるように、分母は全て「国民所得」(NI)だが、分子が異なる。租税負担率は租税のみを、国民負担率はそれに社会保険料を加えたものを、そして、潜在的国民負担率はさらに財政赤字分も含めて分子として、算出される。というのも、国民の負担は税金だけでなく、社会保険料も強制的に徴収され、また財政赤字分は国債の発行で賄われるが、これも将来の税金から補填されるからである。

そこで、グラフを参照しながら、それらの値を主要な6か国で比較してみよう(財務省資料、2020年の値。なお、この年は各国とも「コロナ」予算であるので、やや安定しないところがあるが)。



資料)財務省資料より作成　https://www.mof.go.jp/policy/budget/topics/futanritsu/sy202302b.pdf

先ず、租税負担率でみると、高い順に、スウェーデン50%、フランス45%、イギリス34%、ドイツ30%、日本28%、アメリカ24%となる。日本は第5位で租税負担は低い。日本は租税の少ない国であると言える。では、国民負担率はどうか。高い順に、フランス70%、スウェーデン55%、ドイツ54%、日本48%、イギリス46%、アメリカ32%と、第4位に上昇。この結果は社会保険料が相対的に高いことを意味する。むろん消費税のように例外はあるものの、租税よりも社会保険料の方が逆進的であることに留意すべきだろう。例えば、スウェーデンでは租税負担率と国民負担率との差は5ポイントに過ぎないので、国民の負担の累進制が維持されていると推測される。さらに潜在的国民負担率をみると、フランス83%、イギリス63%、日本63%、ドイツ60%、スウェーデン59%、アメリカ51%の順で、日本は、第2ないし3位（小数点以下の差異）になる。この背景には大量のコロナ感染症対策よる国債発行があるが、この値をみると日本は中負担国とは言えない。日本の公的な負担の割合は、高負担で知られているスウェーデンを超えており、高負担国である。高負担が必ずしも悪いことではないが、しかし、誰の目から見ても日本が高福祉国でないことが問題であろう。

すなわち、これらの国々の中でみると、昨今の日本ではすでにかなりの財源があるはずだが、その資金が福祉に回って来ていない状況にある。金がないわけではないにも拘わらず、福祉や社会保障は貧弱すぎる。政治の責任は余りに重い。

編集後記

思想家・柄谷行人氏が「バーグルエン哲学・文化賞」を受賞しました。その賞金額の大きさ（百万米ドル≒1億3千万円）に多くの耳目が集まったようですが、受賞作『力と交換様式』は、柄谷氏のこれまでの主張をいわば集大成したものと言ってよいようです。

「力」というのは、交換から生じて資本にやどる観念的な「力」（マルクスが「物神」ととらえた）のことであり、さらに国家に内在する、ホッブスが「リバイアサン」（旧約聖書の「ヨブ記」に出てくる）と呼んだ"怪獣"の「力」のことをさします。

他方、「交換様式」というのは、生産様式としての経済的土台が上部構造を規定しつつ、社会構成体の歴史を決定する、というマルクスの考えについての標準的理解を大枠としては受け入れながら、実は「交換様式」という経済的土台の方がクリティカル・ポイントというべきではないかという形で提示されます。「交換様式」には、A「互酬（贈与と返礼）」、B「再分配」（略取と再分配）、C「商品交換」があり、社会構成体（人類史）は、これらの「交換様式」の組み合わせとして展開されるということですが、交換様式D（Aすなわちアルカイックな社会の"高次元での回復"）の実現こそ、まさに「資本と国家の揚棄」にほかならないという独自の見解が提示されます。

ここでは、その見解の是非については問いませんが、この受賞作のなかで強く印象に残ったくだりがあります。「国家や資本の揚棄」すなわちDの到来は「人が願望し、あるいは企画することによっ

て実現されるようなものではない。それはいわば"向こうから"来るのだ」(同書、395頁)と"喝破"しているのが、それです。もちろん、「没論理」とか「没主体」とか「神頼み」とか論難、難詰する声がいまにも聴こえてきそうに思います。

しかし、資本主義に替わるオルタナティブ社会についてさまざま考察し、議論してきたわたしたち「仙台・羅須地人協会」にとっては、すこぶる〈含蓄〉に富む"喝破"と思わざるをえないのではないでしょうか。人類史の射程はそれほどまでに長大かつ深淵と知ったからです。

とはいっても、例えば、ある総合雑誌が最新号で「新しい戦前と憲法」を特集しているように「現在」逢着する大きな問題に目の鞘を外す必要もあるのはいうまでもありません。

柄谷氏も、授与された賞金は氏が「アソシエーション」とみなす社会運動の組織に寄付するということですから、「現在」を蔑ろにしているわけではなさそうです。〈含蓄〉に富む"喝破"とした所以です。(樹)

この間の主な活動　(2023年以降)

口「セミナー」

・第16回　「大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義』(平凡社新書)を読む(1)」
　半田正樹、1月21日(土)
・第17回　「大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義』(平凡社新書)を読む(2)」
　半田正樹、2月18日(土)
・第18回　「ウイリアム・モリスとアーツ＆クラフツ運動」斉藤淳子、3月18日(土)

口羅須(ラス)ゼミ

・第29回　「『自由意志』について－『自由』、『自由意志』あるいは『自由意志による自己責任』－、その1」　金森明男、2月4日(土)
・第30回　「『自由意志』について－『自由』、『自由意志』あるいは『自由意志による自己責任』－、その2」　金森明男、3月4日(土)
・第31回　「放射性廃棄物処理問題への関わりを通して見えてきたこと－GX基本方針と放射性廃棄物－」　芳川良一、4月1日(土)
・第32回　「(途上国)ビジネス人生の棚卸！－人生110年時代(兼)生涯現役に向けて！－、その1」　河合秀次、4月15日(土)
・第33回　「(途上国)ビジネス人生の棚卸！－人生110年時代(兼)生涯現役に向けて！－、その2」　河合秀次、5月20日(土)(予定)

センダードつうしん　第7号　2023年5月

仙台・羅須地人協会
〒980-0811仙台市青葉区一番町2-5-12
一番町中央ビル　8階「シニアネット仙台」内
HP　http://rasuchijin.jpn.org/
Tel　022-266-5650　FAX　022-266-5662
Mail　rasuchijin-office@rasuchijin.jpn.org